

◆水明インターネット句会◆

令和六年四月

(1)

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
廢線のぽつんと駅舎花吹雪 花冷や膝にきつ目のサポーター	切り株の樹液の染みる草若葉 息継ぎをしつつ目指せり花の山	落椿地に咲きし如朝の庭	畠なはる深吉野に見る花の山	風見鶏見やる彼方に鳥帰る	イーゼルを立てる海岸夏近し	白バイの右折のほうに花の雨	もう春よ声彈ませた妻居らず	落陽をおろがみ終ふる徒遍路	花海棠老いのつれづれ宥むかな	散る花の道登り来て父母の墓	スイートピー合成音の改札機	千年の歴史見て來し老桜	大桜枝垂る山家や花淨土	卒業や名札を外す下足箱	それじや君、蚕は月も齧つたと？	畦青むつけ置き洗い体操着	一		

◆水明インターネット句会◆

令和六年四月

(2)

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21		
朝靄（もや）の零のレンズ草青む 瀬戸内に鉄の灯消ゆる春の暮	幸せの隣にいるよミモザ咲く 春炬燵出会いひの頃に花が咲く	四車線越えてまだ舞う花吹雪	跡目継ぐと決めし心や松の芯	花の雨原稿用紙依存症	振り向けば濁り拡ごる植田かな	シャボン玉とぶ風の産卵のごと	母の名で我を呼ぶ父花朧	若芝ややさしく突く土踏まず	一万歩一歩踏み出す迎春花	花の宴ステップ軽ろし兄八十路	陽炎や野に床敷いて俳談す	花見客分けて囃すやチンドン屋	枕木をそつと彩る花吹雪	惜春や閉づることなき阿修羅の目	夜のほどろ風にこぼるる夏千鳥	小雨降るソメイヨシノの花びらの	釣り堀の釣れぬ至福や目借時				

◆水明インターネット句会◆

令和六年四月

(3)

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	
永き日の始めの一歩の欠伸かな 岩陰の孫いすこぞ磯遊び	春の夜や闇に紛るる恋心 出征も出生も見し木の芽山	山国の「自由民権」春早し	惜春や句帳に夕日及びくる	幼子の手に花びらの舞い込めり	食べ頃の竹の子顔出す称名寺	一飛びの子ら越ゆる川春の夕	病室の母は新緑眩しがる	妻のるす我挑戦の菜飯かな	ピザはリコツタ玉蔵院は花吹雪	催花雨やもうすぐ来ると影を待つ	花盛り壙にも飾る植木鉢	催花雨や希望の町を染めにけり	いきなりの春に初音は調わず	海鳴りの間遠となりぬ蒸鰈	吉野山行きなづむかに春の月	風光り瑠璃色弾き水面刺す	夜桜や木末（こぬれ）は月に掛りをり			

◆水明インター ネット句会◆

令和六年四月

(4)

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	
卒業の無き句の道をとぼとぼと 剥き出しの自我の愛らし春の宵	あぎとふの鯉に崩るる花筏 母の手の下ろすべールや霞草	亀鳴くや鬱々として夜の底 春光に押されて往くや笹の舟	旅の宿差しつ差されつ桃の花 土筆煮て美味くも無きをひと褒めす	春の夜生きていたかと電話くる 土筆摘み電車が来れば手を振りて	鞦韆を漕ぎて雲居とすれ違ふ 鳥交る何がな氣負ふストレツチ	祇園へと産寧坂の花月夜 逆光の人の横顔花篝	春探し昭和の歌の聞こえ来る 花の窓袋をごろんかりんとう	駅前の丸きポストへ春ごころ 藤の花零るる影の紫に	私用にて（春眠攝り過ぎ症候群）	待つだけの磯巾着といふ男										

◆水明インターネット句会◆  
令和六年四月

令和六年四月

(5)

◆水明インターねつト句会◆ 令和六年四月

令和六年四月

花篝燃ゆる花弁の光かな

ラフアエロの若き自画像山笑ふ

異名なりうまのあしがた咲き誇る

# 選りぬきの役者競演春歌舞伎

影向の如くかがよふ朝桜

子らの手に初めてのS u i c a 駅四月

落花舞う左右にキヤツチランドセル

道化師のバントマイムや花の下

春風やけふ改定の時刻表

花の塵ここにも一一ノンクシ一

去年今年余命を起して花見たり

芝川の土手を余さぬ花菜かな

呴きの牛の鼻先風光

口付万里を餌かて瞑める田秀がた

如采一鼎，疗子以三叶大青。

性是心元上所生不外於心有

吉慶風心二編

春忙が國連安和里幾底ナダ

茫茫と云ひろびるゝ春の海

(6)

◆水明インターネット句会◆  
令和六年四月

令和六年四月

白き指戦く吾に春の色

春潮や海軍基地を浮かせけり

「ノルウェーの森」 読了す春夕焼

# 春惜しむエティットビアフ映画会

(7)